

《教育長メッセージ 第18号》

『新年』

新年 あけましておめでとうございます。

みなさんは、子どもの頃、どんな年の暮れと新年を過ごしたのでしょうか。私は、宮城県の三陸の海の町で育ちましたから、田舎の、我が家の慣習で、過ごしていました。



クリスマスが過ぎると、餅つきがありました。父が元気なころは、杵と臼を玄関に出して、餅つきをして、お供え餅を取りました。父が母の手を叩いてしまうのではないかと心配して見ていました。つきたての餅は美味しくて、きな粉をつけてたらふく食べました。お正月用の餅は、押し餅にして、固くなる少し前に、四角く包丁で切りました。高校生ぐらいから、餅切りは、私の仕事でした。

大みそかの午前中に、神棚の掃除をします。新しい年の神様のお札を正面に飾ります。神棚や玄関、台所や便所などに松や幣束を飾ります。神棚の仕事は、父と兄の仕事でした。二男坊の私は、やらせてもらえませんでした。その日の夕方、カレイの煮つけのお膳がふたつ用意され、家族で神棚の前で手を合わせます。お膳は、父と兄が食べました。夕飯の後、一年の厄を払う幣束を父と兄が近くの橋のたもとに持っていきました。大きくなって、兄が帰省しない時は、その役が自分に回ってきて、一人前になった気分でした。

父と兄が他界してからは、私と私の長男がそれを引き継いでいましたが、震災後は、実家がなくなり、今は、綾瀬で母がいっしょに暮らしているので、神棚をどうしようかなと考えているところです。

夕食を食べて、お風呂に入ると下着からすべて新しい服が用意されていました。何もかも新しくして、新年を迎えるのです。子どもの頃は、そんなに服を買ってもらえることはなく、ましては二男坊でほとんどが兄のおさがりでしたから、お正月とお盆のお墓参りの時は、新しい服が用意され、それが楽しみであり、うれしかったことを覚えています。

元日の朝は、元朝参りとして、太平洋を見渡す丘の上から初日の出を拝むのが慣わしでした。まだ暗く凍てついた道を登り、白々と明ける空のもと初日の出を待ちます。しだいに太平洋が温かい色に染まります。

そして、初日の出に手を合わせて願いごとをするのです。

新しい年は、誰にも等しくやってきます。これまでの自分に何があったとしても、誰にでも新たな希望を持つチャンスがやってくるのです。私は、

子どもの頃から、新年を迎える慣わしを繰り返す中で、そう思うようになりました。新しい服も、初日の出も、新しい年の希望を演出するためのものだったのです。

さて、みなさんは、新しい年、新たな自分として、どんな希望をお持ちでしょうか。

2016年、平成28年、丙申の年がみなさんにとってよりよい年でありますように！

次回は、私の『子どもの頃の夢』の話をしてみたいと思います。